

【 復活讃詞 第4調 】



しゆのおんなでしはふくかつのひかるおと  
主女弟子は復活の光おと音  
づれをてんしよりききうけて、  
天使聞き受  
げんそよりのていざいをふるいすて、しと使徒  
原祖定罪をふるいすて、しと使徒  
にほこりていえり、しはほろぼさに  
誇りていえり、しはほろぼされ、  
ハリストスカみは復活つして、せかいに  
神は復活つして、せかいに  
おおいなるあわれみをたまえり。  
大憐賜

【 日本の亜使徒ニコライの讃詞 】



こうえいはちちとことせいしんにきす、いまも、  
光榮父と子と聖神にきす、いまも、  
いつもよよに、アミン。  
何時世々に、アミン。  
しととひとしくどうざなるもの、ちゅう  
使徒等同座者者、ちゅう忠  
じつにしてしんちなるハリストスのえきしゃ、せい  
實神智なるハリストスのえきしゃ、せい  
なるしんにえらばれたるふえ、ハリストスのあい  
神撰筆、ハリストスのあい愛

に み ち た る う つ わ 、 わ が く に の こ う  
 満 器 我 國 光

し ょ お し ゃ 、 あ し と し ゆ き よ う せ い ニ コ ラ イ  
 照 お 者 亜 使 徒 主 教 聖

よ 、 な ん ぢ の ぼ く ぐ ん の た あ め 、 お よ び  
 爾 羊 群 爲 及

ぜん せ か い の た め に 、 い の ち を た も う せ い  
 全 世 界 の 爲 に 生 命 賜 聖

さん しゃ に い の り た ま え 。  
 三 者 祈 給

司祭) ( 黙誦： <sup>せい かみ せいじゃ うち いこ</sup> 聖なる神、<sup>せいさん こえ もつ かしょう</sup> 聖者の中に息い、セラフィムより聖三の聲を以て歌頌せられ、  
<sup>さんえい ことごと てんぐん ふくはい ばんぶつ む ゆう</sup> ヘルヴィムより讚榮せられ、悉くの天軍より伏拜せられ、萬物を無より有と  
<sup>ひと なんぢ ぞう しょう よ つく なんぢ もろもろ たまもの もつ これ かざ</sup> なし、人を爾の像と肖とに依りて造り、爾が諸の賜を以て之を飾り、  
<sup>ねが もの ちえ めいご あた つみ おこな もの す そのすくい ため つうかい</sup> 願う者に智慧と明悟とを與え、罪を行ふ者を棄てずして、其救の爲に痛悔  
<sup>た われらいや ふとう なんぢ しょぼく こ と き おい なんぢ せい</sup> を立て、我等卑しくして不當なる爾の諸僕を、此の時に於ても、爾が聖な  
<sup>さいだん こうえい まえ た なんぢ とうぜん ふくはいさんえい たてまつ た もの</sup> る祭壇の光榮の前に立ちて、爾に當然の伏拜讚榮を奉るに堪うる者と  
<sup>しゅさい なんぢみづか われらざいにん くち せいさん うた う なんぢ じんじ</sup> なしし主宰よ、爾親ら我等罪人の口よりも聖三の歌を受け、爾の仁慈を  
<sup>もつ われら のぞ われら およ じゆう じゆう つみ ゆる わ たましい からだ</sup> 以て我等に臨み、我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、我が靈と體と  
<sup>せい われら しょうがいぜんこう もつ なんぢ つと え たま せい</sup> を聖にし、我等に生涯善功を以て爾に務むるを得せしめ給え、聖なる  
<sup>しょうしんぢよ こせい なんぢ よろこび な しょせいじん きとう よ</sup> 生神女と古世より爾の喜を爲しし諸聖人との祈禱に依りてなり、 )

司祭) 蓋我が神よ、爾は聖なり、我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世世

に、



【 聖三祝文 】

せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 毅 、 せ い な る  
聖 神 聖 勇 毅 聖

じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ れ め  
常 生 者 我 等 憐

よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 毅 、 せ い  
聖 神 聖 勇 毅 聖

な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ れ  
常 生 者 我 等 憐

め よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 毅  
聖 神 聖 勇 毅

せ い な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ  
聖 常 生 者 我 等 憐

れ め よ 。 こ う え い は ち ち と こ と せ い し ん  
光 榮 父 子 聖 神

に き す 、 い ま も い つ も よ よ に 、 ア ミ ン。  
歸 今 何 時 世 世

せ い な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ  
聖 常 生 者 我 等 憐

れ め よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う  
聖 神 聖 勇

き、せいなるじょうせいのもものよ、われらを  
 殺 聖 常 生 者 我 等 を  
 あわれめよ。  
 憐

司祭) ( 黙誦：主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國  
 の光榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、今も何時も世に、 )

【 提綱 (プロキメン) 主日第4調 】

司祭) 慎みて聽くべし、衆人に平安、

なんぢのしんにも。  
 爾 神

司祭) 睿智、

誦經) プロキメン、主よ、爾の工業は何ぞ多き、皆智慧を以て作り、

しゅよ、なんぢのしわざはなんぞおおき、  
 主 爾 工業 何 大  
 みなちえをもつてつくれり。  
 皆 智慧 以 作

誦經) 我が靈よ、主を讃め揚げよ、主我が神よ、爾は至りて大なり、

しゅよ、なんぢのしわざはなんぞおおき、  
 主 爾 工業 何 大  
 みなちえをもつてつくれり。  
 皆 智慧 以 作

誦經) 主よ、爾の工業は何ぞ多き、



【 使徒經 (アポストロス) 166 端 コリント前書 16 章 13~24 節 】

司祭) <sup>えいち</sup> 睿智、

誦經) <sup>せいしと</sup> 聖使徒パヴェルが<sup>じん たつ</sup> コリント人に<sup>ぜんしよ よみ</sup> 達する前書の讀、

司祭) <sup>つつし</sup> 謹 <sup>き</sup> みて聽くべし、

誦經) <sup>けいてい</sup> 兄弟よ、<sup>なんぢらけいせい</sup> 爾等傲醒せよ、<sup>しん た</sup> 信に立て、<sup>いさ けんご</sup> 勇め、堅固なれ。凡の事<sup>およそ</sup> 愛を以て<sup>ことあい</sup> 行え。兄

<sup>てい</sup> 弟よ、<sup>いえ</sup> ステファンの家は<sup>はつもの</sup> アハイヤの初實にして、<sup>かつおのれ</sup> 且己を<sup>せいと</sup> 聖徒に<sup>つと</sup> 務むることに<sup>ささ</sup> 獻げしは、

<sup>なんぢら</sup> 爾等の<sup>し</sup> 知る<sup>ところ</sup> 所なり、<sup>われなんぢら</sup> 我爾等に<sup>もと</sup> 求む、<sup>なんぢら</sup> 爾等も<sup>か</sup> 此くの<sup>ごと</sup> 如き者、<sup>もの</sup> 及び<sup>およ</sup> 凡そ<sup>およ</sup> 助<sup>じよりよく</sup> 力する者

<sup>きんろう</sup> と、<sup>もの</sup> 勤勞する者<sup>ふく</sup> とに<sup>われ</sup> 服せよ。我は<sup>およ</sup> ステファン、<sup>きた</sup> フォルトウナト、<sup>よろこ</sup> 及び<sup>きた</sup> アハイクの<sup>よろこ</sup> 來りしを喜

<sup>かれら</sup> ぶ、<sup>われ</sup> 彼等は<sup>われ</sup> 我が爲に<sup>なんぢら</sup> 爾等の<sup>か</sup> 缺くる<sup>ところ</sup> 所を<sup>おぎな</sup> 補えり、<sup>けだしかれら</sup> 蓋<sup>われ</sup> 彼等は<sup>なんぢら</sup> 我と<sup>こころ</sup> 爾等との<sup>やす</sup> 心を安ん

<sup>か</sup> じたり。此くの<sup>ごと</sup> 如き者<sup>もの</sup> を<sup>うやま</sup> 敬え。アシヤの<sup>しよきようかい</sup> 諸教會は<sup>なんぢら</sup> 爾等の<sup>あん</sup> 安を問う。アキラ<sup>およ</sup> 及び<sup>およ</sup> プリス

<sup>そのいえ</sup> キラは、<sup>きようかい</sup> 其家の<sup>とも</sup> 教會と<sup>しゅ</sup> 偕に、<sup>あ</sup> 主に<sup>せつ</sup> 在りて<sup>なんぢら</sup> 切に<sup>あん</sup> 爾等の<sup>しゅうけいてい</sup> 安を問う。衆<sup>なんぢら</sup> 兄弟<sup>なんぢら</sup> 爾等の<sup>あん</sup> 安を

<sup>と</sup> 問う。爾等<sup>なんぢら</sup> 聖なる<sup>せい</sup> 接吻<sup>せつぶん</sup> を以て<sup>もつ</sup> 互に<sup>たがい</sup> 安を問え。我<sup>われ</sup> パヴェル<sup>て</sup> 手づから<sup>なんぢら</sup> 爾等の<sup>あん</sup> 安を問う。主<sup>しゅ</sup>

<sup>あい</sup> イイス<sup>もの</sup> ス ハリストスを愛せざる者は「アナフェマ」たるべし、「マラン、アファ」。願わくは<sup>ねが</sup> 我等<sup>われら</sup>

<sup>しゅ</sup> の主<sup>おんちよう</sup> イイス<sup>なんぢら</sup> スの恩寵は<sup>とも</sup> 爾等と<sup>あ</sup> 偕に<sup>わ</sup> 在らんことを。我が<sup>あい</sup> 愛も<sup>あい</sup> ハリストス<sup>あい</sup> イイス

<sup>おい</sup> スに於て<sup>なんぢら</sup> 爾等<sup>しゅうじん</sup> 衆人と<sup>とも</sup> 偕に<sup>あ</sup> 在るなり、「アミン」。

\*\*\*\*\*

(比較用 口語訳)

目をさましていなさい。信仰に立ちなさい。男らしく、強くあってほしい。いっさいのことを、愛をもって行いなさい。兄弟たちよ。あなたがたに勧める。あなたがたが知っているように、ステパナの家はアカヤの初穂であって、彼らは身をもって聖徒に奉仕してくれた。どうか、このような人々と、またすべて彼らと共に働き共に労する人々とに、従ってほしい。わたしは、ステパナとポルトナトとアカイコとがきてくれたのを喜んでいる。彼らはあなたがたの足りない所を満たし、わたしの心とあなたがたの心とを、安らかにしてくれた。こうした人々は、重んじなければならない。アジアの諸教会から、あなたがたによろしく。アクラとプリスカとその家の教会から、主にあって心からよろしく。すべての兄弟たちから、よろしく。あなたがたも互に、きよい接吻をもってあいさつをかわしなさい。ここでパウロが、手づからあいさつをしるす。もし主を愛さない者があれば、のろわれよ。マラナ・タ (われらの主よ、きたりませ)。主イエスの恵みが、あなたがたと共にあるように。わたしの愛が、キリスト・イエ

スにあつて、あなたがた一同と共にあるように。

\*\*\*\*\*

司祭) <sup>なんぢ へいあん</sup> 爾に平安、

誦經) <sup>なんぢ しん</sup> 爾の神にも、アリルイヤ、

【 アリルイヤ 主日第4調 】

司祭) <sup>えいち</sup> 睿智、

Ari-ru-i-ya, Ari-ru-i-ya,  
A-ri-ru-i-ya.

誦經) <sup>かみ なんぢ ほうざ よよ あ なんぢ くに けんぺい せいちよく けんぺい</sup> 神よ、爾の寶座は世世に在り、爾の國の權柄は正直の權柄なり、

Ari-ru-i-ya, Ari-ru-i-ya,  
A-ri-ru-i-ya.

誦經) <sup>なんぢ ぎ あい ふほう にく</sup> 爾は義を愛し、不法を惡めり、

Ari-ru-i-ya, Ari-ru-i-ya,  
A-ri-ru-i-ya.

司祭) ( 黙誦: <sup>ひと あい しゅさい わ こころ かみ し ちえ いさぎよ ひかり かがや わ しねん</sup> 人を愛する主宰よ、我が心に神を知る智慧の淨き光を輝かし、我が思念

<sup>め ひら なんぢ ふくいん おしえ さと たま わ うち なんぢ ふく いましめ</sup> の目を啓きて、爾が福音の教を悟らしめ給え、我が衷に爾の福たる誠を

<sup>おそ おそれ い われら ことごと にくたい よく ふ およ なんぢ よろこ ところ</sup> 畏るる畏をも入れて、我等が悉くの肉體の慾を踏み、凡そ爾の喜ぶ所

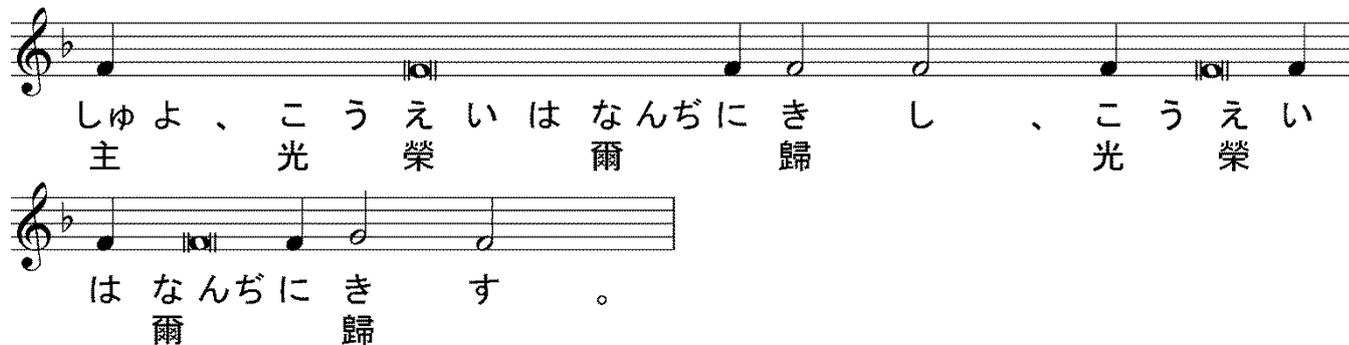
おも か おこな ぞくしん せいかつ す いた たま けだし かみ  
 を思い且つ行いて、屬神の生活を過ぐるを致させ給え、蓋 ハリストス神よ、  
 なんぢ わ たましい からだ こうしょう われらなんぢ なんぢ むげん ちち しせいしぜん  
 爾は我が靈と體との光照なり、我等爾と爾の無原の父と至聖至善にし  
 いのち ほどこ なんぢ しん こうえい けん いま いつ よよ  
 て生命を施す爾の神とに光榮を獻ず、今も何時も世世に、アミン。 )

【 福音經 (エヴァンゲリオン) マトフェイ福音書 87 端 21 章 33~42 節 】

司祭) 睿智、肅みて立て聖福音經を聴くべし、衆人に平安、



司祭) マトフェイ傳の聖福音經の讀、



司祭) 謹みて聴くべし、

司祭) 主は左の譬を設けて曰えり、家主あり、葡萄園を植え、之に籬を環らし、其中に酒  
 樽を掘り、塔を建て、之を園丁に託して、他方に往けり。果斯近づきたれば、彼は其  
 果を收めん爲に、諸僕を園丁に遣ししに、園丁は其僕を執えて、或者を打ち、或者  
 を殺し、或者を石にて撃てり。復他の僕を先より多く遣ししに、之にも是くの如く行  
 えり。遂に己の子を彼等に遣して曰えり、我が子に愧ぢんと。然れども、園丁子を見て、  
 相語りて曰えり、此れ嗣子なり、往きて、彼を殺して、其嗣業を取らん。乃彼を執え  
 て、葡萄園の外に曳き出だして殺せり。然らば葡萄園の主來らん時、何をか此の園丁に  
 行わん。彼等曰く、此の悪しき者を情なく滅し、葡萄園を以て他の園丁、即時  
 に及びて彼に果を收めん者に託せん。イスス彼等に謂う、爾等は聖書に、工師が棄て  
 たる石は屋隅の首石と爲れり、此れ主の爲す所にして、我等の目に奇異なりとすと、云う

いま かつ よ  
を未だ嘗て讀まざりしか。

\*\*\*\*\*

(比較用 口語訳)

ある所に、ひとりの家の主人がいたが、ぶどう園を造り、かきをめぐらし、その中に酒ぶねの穴を掘り、やぐらを立て、それを農夫たちに貸して、旅に出かけた。収穫の季節がきたので、その分け前を受け取ろうとして、僕たちを農夫のところへ送った。すると、農夫たちは、その僕たちをつかまえて、ひとりを袋だたきにし、ひとりを殺し、もうひとりを石で打ち殺した。また別に、前よりも多くの僕たちを送ったが、彼らをも同じようにあしらった。しかし、最後に、わたしの子は敬ってくれるだろうと思って、主人はその子を彼らの所につかわした。すると農夫たちは、その子を見て互に言った、『あれはあと取りだ。さあ、これを殺して、その財産を手に入れよう』。そして彼をつかまえて、ぶどう園の外に引き出して殺した。このぶどう園の主人が帰ってきたら、この農夫たちをどうするだろうか。彼らはイエスに言った、「悪人どもを、皆殺しにして、季節ごとに収穫を納めるほかの農夫たちに、そのぶどう園を貸し与えるでしょう」。イエスは彼らに言われた、「あなたがたは、聖書でまだ読んだことがないのか、『家造りらの捨てた石が隅のかしら石になった。これは主がなされたことで、わたしたちの目には不思議に見える』。

\*\*\*\*\*

しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえい  
主 光 榮 爾 歸 光 榮

はなんぢにきす。  
爾 歸